

# 映像素材を使用した学習活動に対する

## 学習者から見たビリーフ

—教室場面の学習活動の場合—

保坂敏子\*1・土井真美\*2

### 要 旨

近年、日本語教育において多様な映像素材が利用されている。筆者等は現実の生活の中で求められる音声言語理解能力の養成を目的に、授業設計の手順に則り様々な映像素材を利用した授業を計画した。しかし授業を実施してみると、学習者と教師の映像を使った学習の方法や効果に対する考え方、すなわちビリーフにずれがあるために問題を生じることがあった。本稿では、上記のような問題を解決して効果的な学習活動を展開させることを目的に行った映像素材を使用した学習に対する学習者側のビリーフ調査の結果と、それを反映させて実施した授業、およびその結果としての学習者の変容について報告する。ビリーフ調査の結果、学習者は「言語重視」「ボトムアップ的理解重視」の傾向にあることが分かった。このような学習者に対して、他の学習内容や学習方法の有効性に気付かせ、学習者の選択肢を増やすために「意味内容重視」「トップダウン的理解重視」の授業を試みた。その結果、学習者のビリーフに変容が起きたことが確認できた。

キーワード：ビリーフ 映像素材 学習内容 学習方法 ビリーフの変容

### 1. 研究の背景

近年、日本語教育において映像素材が広く利用されている。使用される映像素材の種類も、日本語教育用に開発された教材だけでなく、ニュースやドキュメンタリー、映画、ドラマ、アニメ、CM など多岐にわたっている。このような映像素材を使って授業を設計する場合、まず教育目標を設定し、それを達成するために必要な学習項目（話題・情報、語彙・表現、技能、学習ストラテジーなど）を考える。次に、その教育目標と学習項目に適した映像素材を素材の提供する内容から判断して選択し、配列を考える。そして効果的だと思われる学習活動を選択して授業を組み立てていくという方法がある<sup>1)</sup>。しかし、授業を実際に実施してみると、映像を使った学習の方法や効果に対する学習者側の期待や信念が教師側の期待や信念と一致せず、その結果学習活動において問題が生じることがある。例えば、教師が選択した素材に興味があれば学習者の意欲は減退する。また練

習方法や学習する順番といった学習方法が異なれば不満感を持つことになる。最終的には学習達成感にも影響を及ぼす。学習の方法や効果に対するこのような学習者の期待や信念は、多くの場合それまでの学習経験に基づいていると思われる。ここでは、このような学習方法や効果に対する考え方をビリーフと呼ぶ。学習活動上のこのような問題を解決し、より効果的に学習活動を展開するためには、その前提として学習者や教師の学習方法と効果に対するビリーフの実態を予め把握することが不可欠であろう。学習者のビリーフを調べて授業に生かすことは、教育効果を高めるために意義のあることと考える。

ビリーフの把握の重要性は、教育心理学や教育メディア研究の分野で言われている適性処遇交互作用 (Aptitude Treatment Interaction : ATI) あるいは特性処遇課題交互作用 (Trait Treatment Task Interaction : TTTI) の視点からも伺える。ATI では、学習者の諸特性と処遇 (教育方法) には相性のようなものがあり、処遇の効果は学習者の特性によって異なると考える。TTTI は ATI の枠組みにさらに「学習課題 (=学習目標)」の条件を加え、学習効果は学習者の特性と処遇および学習課題との関係から検討する必要があるとする (中野 1988)。ATI や TTTI という考えは、学習内容や学習方法を決定する際、「学習目標」と「学習者の特性」を十分把握した上で、「より効果的な学習内容と学習方法」を考えることの重要性を示すもので、ビリーフは学習者の諸特性の1つと言えるだろう。

言語学習に関する学習者のビリーフについて調査したものには Wenden (1987)、Horwits (1987) 等がある。Wenden (1987) は、学習者のビリーフの違いによって学習者の使用するストラテジーや学習への取り組み方が異なることを明らかにしている。Horwits (1987) はビリーフを調査する道具として Beliefs About Language Learning Inventory (BALLI) <sup>2)</sup>を開発して調査を実施している。その報告の中で、学習改善のために教師が学習者のビリーフを把握することの重要性を指摘し、認知スタイルや情意変数に比べて教師の介入によって変化させやすいと述べている。このように、ビリーフは学習行動を背後で支え、学習行動に影響を与えるものである。また、学習の阻害要因となっているようなビリーフがあれば教師がそのビリーフを変容させることによって学習を促進させることができると考えられるものである。日本語教育においてもビリーフについての調査・研究が進められている。Horwitz の BALLI を応用したもの (岡崎 1996、野山 1995、橋本 1993、渡辺晴 1990) や、「好み」に着目した調査 (渡辺裕 1997) が見られる。しかし、これらは言語学習全般に関する報告であり、特定技能の習得や学習方法に関するビリーフの研究は少ない。そこで今回、映像素材を使った学習活動に対する学習者のビリーフの傾向を探索的に調べることを目的に、自由記述のアンケート調査を実施した。

## 2. アンケート調査の目的と方法

### 2.1. 調査の目的

本アンケート調査では、映像素材を使った効果的な授業を設計することを目標に、教室場面でビデオを使った学習活動（以下ビデオ学習）に対し、学習者はどのような学習内容と学習方法を効果的だと認識し、何を期待しているのか、すなわち学習者のビデオ学習に対するビリーフの傾向を把握することを目的とする。

### 2.2. 調査対象者

調査対象は、大学の留学生別科で学ぶ日本語学習者で、選択科目「上級前期音声言語理解」に登録した者である。21名からの有効回答を得た。内訳は表1のとおりである。

表1 学習者の内訳

性別	男：8 女：13
レベル	上級後期：4 上級前期：16 中級：1
国籍	韓国：14 中国・台湾・オーストラリア：各2 アメリカ：1
学習期間	6ヶ月～1年：3 1年～2年：9 2年～5年：5 5～10年：3 不明：1

今回調査を行った「上級前期音声言語理解」は、中級後半から上級後半レベルの学習者を対象に「音声言語理解能力」の養成を目的にしたコースである。本コースの学習者は、主に大学院での研究や専門的な仕事に従事するために日本に滞在する者で、日常生活や研究、仕事など現実生活の中で必要となる音声言語理解能力の習得を求めている。これまでに行った数度のニーズ調査からは、学習者は教室や教科書で学んだ日本語と現実生活で接する日本語との差を強く感じ、現実生活での日本語が理解できないという問題を抱えていることが分かった。そして、現実的な音声言語の理解、中でも例えば若者言葉といった社会言語学的な側面である言語の位相差、待遇表現、スピーチレベルやスピーチスタイルとその使い分けについて学習することを強く希望している。また、日常生活においても、研究や仕事においても、ある程度まとまった内容と量が理解できるようになることを求めていることも明らかになった。そこで本コースでは、学習者が現実生活で求められるインターアクション能力<sup>3)</sup>としての音声言語理解能力を養成すること、すなわち言語能力、社会言語能力、社会文化能力の全ての側面から音声言語理解能力の向上を図ることをコース目標に設定した。そしてこのような能力を養成するためには、言語的情報や聴覚情報だけでなく非言語的情報や視覚情報の理解も不可欠である<sup>4)</sup>と考え、授業では映像素材を使用することにした<sup>5)</sup>。また、様々

な種類のビデオをある程度の量続けて見せるという方式で授業を実施している。

### 2.3. 調査方法

調査は1999年4月27日に実施した。コース開始から3回目の授業<sup>6)</sup>で、クラスでアンケート用紙を配布し、その場で回収した。アンケートは自由記述方式で、①学習者のプロフィール、②ビデオ学習の経験の有無と使用した素材、③ビデオ学習の内容と方法に関する考え方について自由に回答を記述してもらった。③のビリーフに関する質問の内容は、次の3つからなる。

- ①ビデオ学習経験に基づいて答えるもの（経験による認識）
- ②これからのビデオ学習について答えるもの（期待）
- ③効果的なビデオ学習方法について尋ねたもの

## 3. アンケート調査の結果と分析

### 3.1. 調査の結果

アンケートの結果、対象者のうちビデオ学習の経験を持つ者は16名で、そのうち15名が「ビデオ学習は日本語の勉強に役に立った」と答え、残りの一人は「中間」と答えた。使用された素材は表2のとおりドラマが最も多かった。数字は延べ人数を表している。

表2 これまでに使用したビデオ素材

ドラマ	7	NHKドラマ（あぐり） ラブジェネレーション 101回目のプロポーズ 他
日本語教育用ビデオ	5	ヤンさん 日本語でだいじょうぶ NHK 日本語講座 他
ニュース	4	NHK ニュース 他
映画	4	Shall We ダンス？ シコふんじゃった。 他
アニメ	3	ちびまるこちゃん 他
CM	2	
ドキュメンタリー	1	NHK スペシャル
その他	3	

各自由記述の質問に対するコメントは、内容に共通性のあるものによって分類した。分類の結果は以下の通りである。回答に関しては複数回答も可能とした。数字は回答の件数を示している。

<ビデオ学習経験に基づく認識>

質問1：ビデオ学習のどんなところが良かったですか。(ビデオ学習経験者のみ)

語彙・表現学習	日常的会話の語彙・表現が勉強できる	6
聞き取り学習	聞き取りの練習になる 会話のスピードに慣れる	3 2
日本人の生活の理解	日本人の生活がよく理解できる	2
会話学習	会話の練習になる	1
その他	実用性がある	1
	具体性がある	1
	その他	2

質問2：どんな勉強の仕方が役に立ちましたか。(ビデオ学習経験者のみ)

繰り返し視聴		4
視聴後の活動	話し合い	1
	語彙・表現練習	1
	ドラマ演技	1
	内容理解問題	1
説明	教師による説明	2
	日本人による説明	1
メモをしながら視聴		1

<これからのビデオ学習に対する期待>

質問3：このクラスでビデオを使って何が勉強したいですか。

素材	映画	7
	ドラマ	4
	ニュース	4
	ドキュメンタリー	1
	CM	1
	新しいものなら何でも	1
学習内容	語彙・表現	11
	聴解・聞き取り	8
	日本の政治・経済	2
	日本文化	2
	話すこと	1

質問4：このクラスでビデオを使ってどのように勉強したいですか。

繰り返し視聴する	3
単語・表現の練習をする	3
先生の説明を聞く	2
会話を練習する	2
内容理解質問に答える	1
大意を把握する	1
一語一句理解する	1
CMを詳しく理解する	1

<効果的なビデオ学習方法に関する認識>

質問5：ビデオ学習は、どのような方法が一番効果的だと思いますか。

語彙・表現リストを配布する	4
語彙・表現を繰り返し勉強する	3
語彙・表現の学習後に視聴する	2
できるだけたくさん視聴する	2
語彙・表現学習後、内容理解する	1
スクリプトで文字を確認する	1
テープを繰り返し聞く	1
大意把握をする	1
視聴後、説明を聞く	1
視聴後、表現練習をする	1
集中すればどんな方法でもいい	1
わからない	2

### 3.2. 調査結果の分析

分類の結果、ビデオ学習の長所で最も回答の多かったのは「日常的会話の語彙・表現が勉強できる」（質問1）で、これからの学習内容に対する期待も「語彙・表現」が最も多かった（質問3）。学習方法については「繰り返し視聴」が役に立ったという声が多く（質問2）、また、これからの学習方法としても「繰り返し視聴」を期待する声が多かった（質問4）。さらに、一番効果的だと思う学習方法では、「語彙・表現リストの配布」や「語彙・表現を繰り返し勉強する」など語彙・表現の学習に関する回答が多く、学習の順序についても「語彙・表現の学習後に視聴する」「語彙・表現の学習後に内容理解する」など語彙・表現をまず確認した

上で視聴して内容を理解することが効果的だという意見が見られた(質問5)。これは、学習者がビデオは言語使用のモデルを提示するものとして有効だと捉え、そこで示される「語彙・表現」を学習内容として重要だと考えていること、また「語彙・表現リスト」によって一つ一つの言葉を確認した上でビデオの内容を理解しようとしていること、さらに「繰り返し視聴」で分からない部分をなくしたいと考えていること、言い換えれば、予め言葉を全て理解しなければ全体の内容が理解できないと考えていることを示している。つまり、学習者はビデオ学習に対して「言語重視」「ボトムアップ的理解重視」というビリーフを持つ傾向にあると言えるだろう。

#### 4. 授業への反映

今回のような傾向にある学習者に対し、「意味内容重視」「トップダウン的理解重視」、すなわち、自分の既有知識や画面の映像情報などを利用してビデオ素材の伝える内容やメッセージを理解することを重視する学習活動を進めていこうとすると、ビリーフの違いから問題が生じることが予測される。しかし、学習者の音声言語理解能力という器を広げるためには、映像素材の学習項目が語彙・表現だけではないこと、語彙・表現を学習した上で視聴するという順番ではなく言葉の意味を推測しながら視聴する方法もあることなどをなんらかの形で授業の中で伝え、学習者のビリーフの変容を促す取り組みが求められる。

今回の授業では、アンケートによる調査結果を踏まえて「意味内容重視」「トップダウン的理解重視」の方法への認識を築くために次のような試みを実施した。

(1) 練習目標を明示する。(=学習項目)

⇒ これからの練習が大意の聞き取りなのか、細かい情報を選択的に聞き取るものなのか等の課題(練習の目標)を事前に明確に知らせる。

(2) 語彙・表現リストを練習の最後に配る。

⇒ 視聴前に単語を学習しないこととその目的を説明する。単語リストを最初に配布しないことに不安を感じる学習者には、コースの目標が現実の生活における音声言語理解能力やインターアクション能力としての音声言語理解能力の養成であること、またそのためにはこのような学習方法が役に立つことを繰り返し説明し、再度(1)の各練習の目標を意識するように伝える。

(3) 一語一句聞き取る必要がないことを経験させる。

⇒ 重要な情報さえ聞き取れば、内容理解という目標は達成できることを経験させる。

⇒ わかりすぎて、かえってわからないことがあること、つまり全部を詳細に聞き取った結果、かえって全体の意味がわからなくなってしまうことがあることを経験させる。

具体的な学習活動の中でみてみることにする。ビリーフ調査直後の授業において、次のような手順で練習を実施した(ワークシート 資料1)。この練習は特に上述(3)の一語一句聞き取る必要がないことを経験させるためのものである。素材としては8分程度の報道特集番組を使った。

①番組全部を視聴して、大意把握問題に答える。よく分からなかった場合は推測で答える。

②もう一度視聴し、言葉を聞き取ってスクリプトの穴埋めをする。分からない言葉は分かるまで何度も繰り返し視聴して聞き取る。

③再度①と同じ大意把握問題に答える。

その結果、大意把握問題に対する1回目の推測を含めた解答と2回目の細かい聞き取りをした後の解答がほとんど変わらなかった者が多く見られた。また、中には、1回目の解答より2回目の解答の方が設問に対してポイントが絞りきれていなかったり、間違ったりする場合もあった。この結果はクラスにフィードバックして、必ずしも一語一句聞き取って言葉が全てわかることで重要な情報が理解できるものではないということを明示した。

上述(2)に関しては、授業で単語・表現リストを最初に配布しない目的を説明した上で練習の最後に配布するようにした。例えば、ドラマ「ロングバケーション」を使用した際も、最初にドラマを20分程度視聴して大意把握質問に答えて全体的な内容を把握し、学習項目に即した聞き取り練習をして、最後に単語・表現リストを渡した(資料2)。学生からは、次の週の単語リストを前の週に受け取って意味を調べてきたいという意見もあったが、そのような学生には現実生活でテレビでドラマやニュース等を視聴する場合単語リストを調べてから視聴するようなことはないこと、またコースの目標が現実生活における音声言語理解能力を習得することで、授業での練習を通してそのような能力を伸ばしたいと思っているということを説明するようにした。単語・表現リストには、日常生活においてよく聞かれるようなもの、若者言葉など辞書に載っていないようなもの、映像や場面があるからこそ意味が理解できるようなもの、映像や場面との結びつきが強いものを中心に採り上げた。

このような授業を実施した結果、始めは新しい学習方法に対する戸惑いと抵抗を見せる者もいたが、前述(1)~(3)に挙げたような練習の目的や現実生活での音声言語理解活動について繰り返し説明したり、別の学習方法を体験させることによって、コース進行とともにそれはあまり見られなくなった。コース終了時のアンケートでこのコースの学習方法で良かった点を質問したところ、「単語リストを見なくてまずビデオを見たこと」が挙げられていた。また、トップダウン的視聴方法に気付かせる方略として行った一語一句を繰り返し視聴で聞き取る練習について「繰り返し見たこと」が「つらかった」というコメントが見られた。これは、語彙・表現を学習してから視聴するという学習の順番と一語一句を聞き取るという学習方法に対する学習者のビリーフに変容があったことを示しているといえる。しかし一方で、「繰り返し見たこと」が「役に立った」という予期していなかった意見も見られた。

## 5. 今後の課題

以上、映像素材を使った授業に対する学習者と教師のビリーフのギャップを出発点に、アンケートで調べた学習者のビリーフの傾向、それを踏まえた授業での試みおよびその結果としての学習者のビリーフの変容について報告した。「言語重視」「ボトムアップ的理解重視」の傾向を持つ学習者に対して「意味内容重視」の「トップダウン的視聴方法」を経験させその有効性に気付かせようという試みは、ある程度の成果が得られたと言える。しかし一方で、「繰り返し視聴」については、一字一句聞き取る必要のないことを示すための方略として「繰り返し視聴」を利用した結果、改めて「繰り返し視聴」を有効だと再認識させるような結果ともなった。「繰り返し視聴」する目的には種々のものがあり、また回数も一様ではない。例えば、大意把握した上でその解答を音声と映像で確認するためにもう一度視聴する活動も「繰り返し視聴」と認識されるだろう。また、一つの言葉を聞き取るために分かるまで何度も繰り返して聞く活動も「繰り返し視聴」として認識される。今回のビリーフ調査ではこれらを一括して「繰り返し視聴」として調査を行ったため、学習者の考えている「繰り返し視聴」の詳細は把握しきれていない。今後、繰り返し視聴の種類を整理し、どのような「繰り返し視聴」を学習者が有効と考えるかを詳しく調べる必要があるだろう。

効果的な学習活動の展開を目指してビリーフの変容を図る場合、その目的は学習者のビリーフを180度変容させることではなく、他の方法にも気付かせ、選択肢の幅を広げることと考える。今回は大意を理解する方法として、一語一句を全ては聞き取らない方法と予め語彙・表現を学習しないで視聴するという学習の順番の有効性への認識を築くことはできた。今後さらに学習者のビリーフ調査を進

め、今回のような授業を実践すると同時に、学習者の変容についても調査を行い、それらを参考に学習者のビリーフの選択肢を広げるより効果的な方法を追求していきたい。また、教師側のビリーフについても調査を行い、教師と学習者間のギャップの実態を知り、そこで起きる問題とその対応についても検討する必要があると考える。

## 引用文献

- 大内茂男・中野照海編（1982）『授業実践に生かす教育工学シリーズ第1巻 授業の設計と実施』（図書文化社）
- 大田信男他（1994）『コミュニケーション学入門』（大修館書店）
- 岡崎眸（1996）「教授法の授業が受講生の持つ言語学習についての確信に及ぼす影響」『日本語教育』89, pp.25-38, 日本語教育学会
- 中野照海（1988）「視聴覚教育入門講座2 視聴覚教育研究の展開」『視聴覚教育』1988年5月号, pp30-33, 日本視聴覚協会
- ネウストプニー, J.V.（1995）『新しい日本語教育のために』（大修館書店）
- 野山広（1995）「JFL 場面における『ビリーフス』調査の重要性と活用に関する一考察:豪州・メルボルン地区の高校生の場合を事例として」『日本語教育論集』12, pp.61-90, 国立国語研究所日本語教育センター
- 橋本洋二（1993）「言語学習についての BELIEFS 把握のための試み - BALLIーを用いて」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8, pp.215-241, 筑波大学留学生センター
- 渡辺晴世（1990）「学習者のビリーフスとラーニングストラテジー」『日本語教育論集』7, pp.94-119, 国立国語研究所日本語教育センター
- 渡辺裕司（1997）「オーストラリアのハイスクール生の日本語学習における『好み』」『日本語教育』95, pp.121-132, 日本語教育学会
- Horwits, E.(1987) Survery Student's Beliefs about Language Learning. Wenden and Rubin (eds.) *Learner Strategies in Language Learning*, London, UK, Prentice-Hall International
- Wenden, A. (1987) How to be a Succdessful Oanguage Learner: Insights and Perceptions from L2 Learner. Wenden and Rubin (eds.) *Learner Strategies in Language Learning*, London, UK, Prentice-Hall International

## 注

- 1) 映像素材を利用した授業を計画する方法としては、最初に素材を選択してから

その素材の何をどう指導するかを考えるなど多様な方法が考えられるが、著者等は授業設計の手順（大内・中野 1982）に則って、まず教育目標を設定し、必要な学習項目を考えた上で、素材の選択と配列を行うという方法をとっている。

- 2) Horwitz の開発した BALLI は、(1)言語に対する適性、(2)言語学習の難易度、(3)言語学習の性質、(4)学習・コミュニケーション ストラテジー、(5)言語学習の動機の 5 領域に関する 35 項目の質問から成るアンケート調査票である。
- 3) ここで使用しているインターアクション能力、言語能力、社会言語能力、社会文化能力などの用語の定義は、ネウストプニー(1995)に従っている。
- 4) 双方向コミュニケーション場面において受け手が送り手の意図をメッセージから読み取る際に手掛かりとするものは、顔面の表情や身振り、視線などが 50%近く、声の調子や抑揚、話し方が 30%近く、言語情報はわずか全体の 1 割程度という研究成果があること(大田他 1994) が指摘されている。
- 5) 映像素材は著作権の許す範囲内で教育目的のために授業においてのみ使用している。
- 6) 当該機関では 3 回目の授業でコース登録者が決定する。

## ニュースの聞き取り 2

TBS 新サンデーモーニング 1999.4.4 (日) 8:00~10:00 一週間のニュース

1. ニュースを 1 回聞いて次の質問に答えてください。

☆今回の男女雇用機会均等法の改正の 2 つのポイントは何ですか。

・

・

2. ニュースの中に出てきた言葉を思い出しましょう。

3. もう一度ニュースを聞きながら ( ) の中に言葉を書いてください。

- (1) 新年度 ( ) から ( ) 男女雇用機会均等法がスタートした。  
 (2) ( ) から 10 年の女性のための ( ) は ( ) からの  
 変更をしなければならなくなった。  
 (3) この法律によって ( ) あるいは ( ) の募集ができなくな  
 った。  
 (4) 例えば、保母は ( )、スチュワーデスは ( ) ある  
 いは客室乗務員、看護婦は看護婦・( ) と男女両方 ( )  
 しなければならなくなった。  
 (5) ( )・風紀・( ) 上の理由以外は原則として ( )  
 である。  
 (6) ( ) どちらかの性別に ( ) したい言い方はできなくなった。  
 (7) 女性の仕事に男性も ( ) という例も出ている。  
 (8) 今回の改正は ( ) 流れを受けて雇用や ( ) などに ( )  
 をなくすために行われた。  
 (9) 制裁として、( ) 企業は名前を ( ) される。  
 (10) 企業の採用担当者は ( ) が来たらどう ( ) かと戸惑って  
 いるようである。  
 (11) もう一つのポイントは ( ) が ( ) されたである。  
 (12) 改正関連のビデオや ( ) の売れ行きが ( ) である。  
 (13) 人事院も ( ) 向けに ( ) を作った。  
 (14) ( ) 公務員 ( ) 人を対象に ( ) を行っ  
 た結果、女性職員の ( ) 人に ( ) 人が ( ) を強要されていた。  
 (15) 今回の ( ) にはセクハラになり得る ( ) が細かく記  
 されている。  
 (16) ( ) を職場に貼る、カラオケで ( ) を強要す  
 る、「今日は ( ) か、もう ( ) か」と聞く、  
 ( ) を聞く、などである。

- (17)女性は「( )に感じたらセクハラになる」と述べている。  
(18)男性は、「ちょっと( )だけで言われるかと心配」、「うちの会社の女の子はみんな( )なので多分( )してくれる」と述べている。  
(19) 専門家によると「相手が不快に思う( )で、( )によってセクハラになるかどうかは違う」ということである。

4. 最初の問題の答をもう一度書いてください。

☆今回の男女雇用機会均等法の改正の2つのポイントは何ですか。

- ・
- ・

資料2

### 単語・表現リスト ロングバケーション 第1話(2)

一文無し (いちもんなし)  
地雷 (じらい) を踏む (ふむ)  
餓鬼 (がき) / クソガキ  
ぱっとしないモデル  
おいしいよな <おいしい話  
負い目 (おいめ) がある  
ゲットする  
チョコベリバ  
トヨエツ  
生まれてから死ぬまで、何食 (なんしょく) 食べられるかわからない  
ちょっとしたモデル  
食 (く) いっぱぐれないですんでいる  
若手 (わかて) の注目株 (ちゅうもくかぶ)

\*1 (慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター)

\*2 (群馬大学留学生センター)

(1) 保坂敏子 Toshiko Hosaka

(自宅) 〒145-0063 東京都大田区南千束 2-26-1-A

Tel & Fax 03-3748-8626

E-mail: VYB02434@nifty.com

土井真美 Mami Doi

(勤務先) 〒371-8510 前橋市荒牧町 4 丁目 2 番地

Tel & Fax 027-220-7501

E-mail: mdoi@aramaki.gunma-u.ac.jp

(2) 保坂敏子 慶應義塾大学 日本語・日本文化教育センター 非常勤講師

土井真美 群馬大学 留学生センター 助教授

(3) 映像素材を使用した学習活動に対する学習者から見たビリーフ

—教室場面の学習活動の場合—

(4) ビリーフ 映像素材 学習内容 学習方法 ビリーフの変容